

追 跡 取 材

いきいきと働き続ける女性職員たち ～4年間のあゆみと今

山野薫 (京都大学大学院農学研究科博士後期課程)

お話を伺った方 古山陽子さん (生活協同組合おおさかパルコープ)
山本深雪さん (生活協同組合コープしが)
原 晶さん (京都生活協同組合)
勝田さや佳さん (市民生活協同組合ならコープ)

2010年に『協う』(『くらしと協同』の前身誌)第119号で、「若い世代の職員が考える魅力ある生協とは」というテーマの座談会を行った。この座談会は、入協後3～5年の配達担当職員にお集まりいただいたのだが、奇しくもみな女性であった。女性の場合、キャリアアップの過程を男性と同じように考えるのは難しい面がある。座談会4年近くが経過し、この間に、公私ともにどのような変化があったのか、それに伴って働き方はどう変化したか、今、働く上でどんなことを考えているのかなどを伺うべく、再び4名のもとを訪れた。



古山陽子さん
(おおさかパルコープ)

現在も、当時と同じ支所で働くのは生活協同組合おおさかパルコープ寝屋川支所の古山陽子さんである。彼女は今、8名の配達担当職員を束ねるチームリーダーである。チームリーダーに指名されたのは、入協5年目だった3年前のこと。サブリーダー経験がないまま、多くの先輩職員を飛び越えて

リーダーに抜擢されたことに、当時はかなりの葛藤があったという。

しかし、いつまでも甘えているのではなく、リーダーに指名してくれた人々の期待に応えられるようになりたいと、自身の振る舞い方を考えるようになった。きっかけは、同僚職員、組合員、センターのパート職員など多くの人から「見られている」ことを感じるようになったからである。他人から見られているとマイナス面を指摘されることもあるが、仕事面体調面などがつらいときには、自分が申し出るよりも先に、周囲がフォローの手を差し伸べてくれることもあり、仕事を円滑に進められている。他にも、リーダーとチームのメンバーの関係は、チームのメンバーと配達に行く組合員の関係に直結していることに気付いたのも大きい。今は対職員でも、対組合員でも同じところがけて接することを忘れないようにしている。

現在、古山さんはこまやかな気配りなど、女性ならではの感性を生かした密な連携で、支所内では正規職員とパート職員との橋渡しの存在にもなっている。だが、圧倒的に男性が多い職場で、以前は女性の正規職員をどのように扱えばいいのかわからないという、とまどいに似た空気があった

と話す。かつては女性の正規職員が配置される支所は偏っていたが、皆が徐々に慣れていき、今では女性の正規職員を受け入れる支所も増えたという。



山本深雪さん
(コープしが)

生活協同組合コープしがが共済事業フロアの山本深雪さんは2010年から共済事業を担当している。元々は配送担当のパート職員だったが、2007年に正規職員へ登用された。

現在は、配送担当者からの情報をもとに、共済を利用したい組合員に保障内容や請求用紙などの案内をするのが主な仕事である。

配送は最も楽しさを感じていた仕事で、毎週同じ時間・場所で自分の配送を待っている組合員の存在が嬉しかった。身近な人の買い物の手伝いをしているような感覚だったが、共済担当になって組合員の割り当てがなくなったことは少し寂しく感じている。加えて、共済はその仕組み上、家計と直結しているため、担当者といえども他人の懐事情を目の当たりにすることにとまどいがあった。とはいえ、配送担当の頃から共済の案内は好きな仕事だったので、共済担当へ異動しても違和感は抱かなかった。配送担当時から目指していた「組合員にも同僚職員にも『また担当してもらいたい』と思ってもらえる職員になれるように」という心構えも変わらなかった。

山本さんには中学生と高校生の子供がいる。以前と比べて子供に手がかからなくなったことで、休日出勤や、遠方への出張にも行きやすくなったことが、4年間での最も大きな変化だと感じている。2013年

度には担当していた支所で、共済事業の目標を全て達成することができ、それを機に他生協へ経験談を伝えるに行くことが増えた。

もっとも、この目標達成について山本さんは、自分は目標を達成できた支所の共済担当だったけれども、本部の共済事業フロア、職種を超えた支所のあらゆる職員など、みんなの協力によって成しえたことであって、決して自分ひとりの成果ではないことを強調する。組合員や現場の様々な職員と密にコミュニケーションをとり、協力を得られたことが目標達成につながったと考えている。



原 晶さん
(京都生協)

座談会からの4年間で結婚・出産を経験し、生活環境が大きく変わった職員もいた。

京都生活協同組合洛東支部に勤務する原(旧姓:渡辺)晶さんは現在、入協6年目だが、2年前に産休・育休を取得した。入協3年目までは宇治市を中心に配送を担当し、妊娠を機に個配推進の担当に異動した。昨年の春に復帰し、現在は時短勤務で、休暇前と同じく個配推進を担当している。

個配推進は組合員数の拡大や店舗利用者にも無店舗事業も利用してもらうように促すことが仕事である。仕事内容の性質上、毎週同じ組合員と顔を合わせることはあまりないが、組合員の生活をサポートする職員のひとりであるという意識から、組合員と距離的に最も近い配送担当者にも、気持ちよく仕事をしてもらえるような気配りを心がけているという。

生協以外の小売業者の展開状況や交通の

便など買い物環境が地域によって違うため、個配推進の仕事は土地柄に左右されるのが難しいところである。ネットスーパーなど、インターネットで注文ができ、1週間以内に商品が到着するサービスを展開する事業者も急増している。そんななかで原さんは、新規組合員に生協の魅力を知ってもらう際に「生協の配送事業を利用したい」ではなく、「生協の商品を利用したい」と思ってもらえるようにと考えている。商品情報を提供する時なども、1商品でも「これは生協で買おう」と思ってもらえるように工夫している。

今は育児時短勤務を利用し、自分の生活も仕事も大事にしているが、なりたい職員像も持っている。今の個配推進は好きな仕事で楽しさも感じているが、一方で、組合員の意見や期待に十分応えきれていないことも実感している。もっと多くの知識や能力を身に着け、ゆくゆくは生協全体を広い視野で見ることのできる職員になりたいと思っている。



勝田さや佳さん
(ならコープ)

市民生活協同組合ならコープ職員の勝田(旧姓:今)さや佳さんは、現在、第1子の育児休暇を取得中。ならコープでは子供が3歳になるまで育児休暇を取ることができ、6歳になるまで時短勤務を選択できる。第2子を妊娠中だが、落ち着けば復職を強く希望している。

勝田さんは入協4~7年目のときに配送を専門に行う子会社へ出向した。サブリーダー的な存在として、自身も配送を担当し

ながら、コース作りや是正の仕事もこなした。仕事内容の面でも体力面でも厳しい環境を経験した後、ならコープに戻り、組合員の拡大などを担当した。

勝田さんは育児を経験する中で、配送中などに組合員から聞いていた子供に対する思いを、より共感できるようになったという。子供への責任から食品の安全性や添加物にも気をつかうようになったが、その一方で在職中をふり返り、もう少し組合員に寄り添った対応ができたのではないかと悔いも残っている。今は、子供と過ごす貴重な時間を得られたことに感謝している。復職後は、産休・育休中に一組合員として感じたことも生かして、生協により貢献できるようがんばりたいと思っている。

今回取材した職員の方々には、生協で働く上で感じていること、考えていることに共通点が多くあった。以下、6点にまとめてみたい。

1点目は、生協の仕事に楽しさとやりがいを感じており、長く勤めたいと思っていたことだ。加えて、研修・指導の機会だけでなく日常の業務から学んだこと、感じたこと、経験したことを自らの糧として吸収し、仕事に対して常にポジティブな姿勢を持っている。

2点目は、周囲の人々への感謝の気持ちを常に忘れないということだ。これは、自由度の高い上司の下でやりたい企画と向き合えたという体験だけでなく、困った状況に置かれたときも、いつも誰かが助けてくれたということにも基づいている。どんな時も、ひとりで仕事をしているわけじゃないことを意識しながら毎日の業務にあたっている。

3点目は円滑なコミュニケーションをと

るためには、先に自分から考えや状況を相手に正直に伝えることが重要だと心得ている点である。それは組合員とのやりとりだけでなく、職員同士であっても同様である。

4点目には、生活環境や部署は異なっても、それぞれに年齢を重ねたことと、経験を積んだことで、組合員に近い目線で生協の商品やサービスをはじめとした様々なものを見られるようになったことが挙げられる。組合員へ商品をすすめる際にも、自分はどんな場面で利用しているか、など体験にもとづいた話の方が説得力が増し、仕事に有利に働いている。

5点目は、自分たちが組合員に近い、女性ならではの目線で商品やサービスについて考えることで、もっと生協を利用してもらいやすい存在にできるのではないかと考えていることだ。このような気持ちを商品・サービスというかたちで実現できるようになれば、さらに一步踏み込んで、生協と組合員が近い関係になれば、筆者も考える。

また、自分たちのあとに続く女性職員がもっと増えて欲しいという願いも持っている。そのためにも、自分が先輩方にしてもらったことを、今度は自分が後輩にしてあげたいという気持ちで日々の業務にあたっている。

今回は4名の職員にご登場いただき、それぞれの今の立場から自身の仕事について語っていただいた。勤務生協や部署が違っていても、仕事をするうえで考えていることや心がけていることに共通点が非常に多く、興味深かった。なかでも、皆が楽しさとやりがいを感じながら、元気にいきいきとしている姿は印象的で、少なくとも今回お話を伺った限りではそれぞれの労働環境が

「ブラック生協」でないことが伝わってきた。5年後、10年後も変わらずに活躍され続けることを祈りたい。